



CANOA

だより

no.

43

2008年11月発行

文・写真 _ 鈴木真由美 編集 _ 橋口博幸 発行 _ ブラジル事務局

Praia do Esteveao s/n, Canoa Quebrada, Aracati-CE-Brasil CEP: 62800-000

今、カノアはカジュ(カシューナツツの実)の季節。老若男女問わず、朝や夕方に森に出かけてはカジュを取って帰ってきます。我が家は庭にカジュの木があり、朝と夕方にカジュを取ります。あまりにもたくさん取れるので、娘はお鍋いっぱいに入ったカジュを保育園に持っていき、みんなでジュースを作って飲んだそうです。子ども達が風邪をひきやすいこの時期に実るといのはやはり自然の摂理なのでしょう。カジュにはビタミンが多く含まれているそうで、この時期の体調を整えるには一番の薬なのとか。その土地で実る食物にはそれなりに意味がある。だからこそ、こういった自然を大切にしていきたいですね。

日本に一時帰国していた際にお世話になった皆様、お忙しい中本当にありがとうございました。報告会に講演会。カノアで活動するだけでなく、皆さんと共有するからこそお互いに学ぶことのできるものがたくさんある。そんなことに毎回気付かせてもらっています。そして、子どもの姿を見てみると、子どもが幸せに過ごすことのできる環境がどれだけ大切であるかということを感じます。子どもが思いきり手足を伸ばし、創造、想像しながら遊ぶことができているか。子ども時代にどれだけ五感を使って遊ぶことができるのか。これが実は人間として成長していく上でとても重要な問題となってくるということを常を感じながら日々子ども達と接しています。だからこそ、“今”だけでなく、その子の一生を感じ取りながら保育に携わっていかれたらと思っています。子どもを見てみると、一人ひとりが今必要としていることを私達に伝えようとしてくれているのではないかと感じるのがよくあります。保育者として、また母親としてそれに気がつき、できる限り答えていければと思っています。



寄付のお願い

私たちの活動は主に日本からの協力、支援によって成り立っています。現地でもアラカチ市教育局との協力により一部の食材や物資支援を得られている他、近隣の商店からの食材支援、物品販売による毎月の収入、各家庭からの洗剤等の寄付を頂けるように努めています。それでも、ブラジルの最低賃金が上がり続ける中、物価も上昇し、それに反して失業率の増加に歯止めがかからない状態において、教職員の給与の確保が難しくなっています。ブラジルの経済向上の背景には、貧富の差の広がりがあり、農漁村地域ではそれが特に深刻化してきています。教育、保健・医療、富める人にはすべてのものが手に入り、貧しい地域には教師や医師さえもないという現状。現地で活動している私達だからこそできることがたくさんある。保護者を中心として、地域住民と協力しながら何とかこの活動を継続していきたいと思っています。子どもが幸せに暮らせる社会というのは、人間すべての人にとっても素晴らしい社会である。だからこそ、子どもがいつまでも笑顔の絶えない、輝く目を持ち続けていくことのできる環境を作り続けていきたいと考えています。

どうか皆さん、今後もここカノアで活動を続けていくことができるようにご支援、ご協力のほど、よろしくお願ひいたします。

栄養不良の子どもがこんなに!?

現地の活動を支援してくれているイタリアの人々が活動を見に訪ねてきてくれました。彼らは毎月食糧支援を行って来ており、また、現地で必要な物資に関しても毎年支援をしてくださっています。今回の訪問では医師である友人を連れてきており、彼女からの申し入れで保育園及び1年生(前ブレ・エスコラ)の子ども20名に対して健康診断を行っていただきました。

小児心臓科医である彼女が一番驚いていたことは20名中17名が栄養不良であるということでした。栄養不良の子どもうち7名は栄養失調であると診断され、その内1名は心臓に欠陥がある恐れがあるとして病院の医師への診断を勧められました。私達教職員にとってもこの結果は本当にショックでした。貧しい漁村とはいえ、以前よりも食料が豊富に手に入るようになっており、体つきを見る限りでは健康に見える子どもたちの多くが栄養不良であると診断されたのですから…

その後、保護者を開き、今回の結果を伝えました。また、診断をしてくれた医師たちは栄養剤や必要な医薬品を寄贈して頂き、教職員によって定期的なケアを行っていくことになりました。栄養失調であると診断された子どもや処方箋を出された子どもの保護者に対しては一人ひとりと直接面談をし、今回の診断結果、そして私達教職員がどのようなケアを行っていくのかを説明しました。

「おなかいっぱい食べていけば体に十分な栄養を得ているのだと思っていた…」

「太っているから栄養に問題はないと思っていた」

保護者からのこれらの言葉を重く受け止めた私達は、今後私たちの活動として食育について取り組んでいく必要があると強く認識しました。

保育園を設立した当初、保育園で食べる食事が唯一の食事であるという子ども達がほとんどでした。今ではその数は2割程度となったのですが、それでも子どもが健康に生活していけるための“食事”をしている家庭があまりにも少ないことが今回の診断で判明したのです。

食育についてどのように取り組んでいくことができるのか。今後の大きな課題の一つとなりました。



音楽プロジェクト、 Music for Canoa が再スタート!!!

保育園から始まった私たちの活動ですが、資金不足や施設の広さ等の問題によって現在では3～10歳までの子ども達を預かるにとどまっています。本当ならばもっと長く子ども達に様々なものに触れ、学ぶ機会を与えてあげたい。でも、現在のところ10歳までが限界なのです。そこで2003年にはサッカー教室が開始され、2005年には音楽プロジェクトもスタートしました。これにより、学童教室を卒業した子ども達も引き続きスポーツや文化に触れる機会を持つことができるようになったのです。

サッカー教室では12歳以上になると別のコーチに引き継がれることとし、今まで休止することなく7歳以上の子どもが男女問わず参加できるようになっています。しかし音楽プロジェクトは指導者不足により、2006年末を持って一時活動を休止していました。2008年6月。スタッフが再編成され、活動の再開準備を始めました。そして9月。新しい指揮者を迎えての再スタートとなったのです!!

以前は合唱、リコーダーグループ、マーチングバンドの3構成で行われていたのですが、今回からマーチングバンド及びギター教室の2つを行うこととなりました。そして、リコーダーは引き続き学童教室にて毎週教えていくこととなったのです。私自身、小学生のころにマーチングバンドでトランペットを吹き、中学生でもブラスバンド部でトランペットを吹いていたこともあり、個人的にも今回の再スタートは本当に嬉しかったです。音楽プロジェクトは主にアメリカの支援団体から資金を得て活動しているのですが、現在ブラジル文化省への登録を準備しており、これによって政府からも資金及び物資援助を受けることが可能となります。

カノアに住む子ども達がこういった芸術に触れることができるというのは新しい可能性を生み出すきっかけにもなると考えています。

もしこのプロジェクトに興味、関心のある方がいましたら是非ご連絡ください。お待ちしております!!

子育て日記より

我が家の娘たちは基本的に体が強く、今まで病気といっても風邪程度。それも一年に一回罹るかどうかでした。しかし保育園に通うようになり、長女はよく鼻風邪をひくようになりました。それでも元気で、食欲もあるため、さほど心配してはいないのですが、次女はまだ乳児のため、なるべく風邪がうつらないようにと気をつけています。それでも一つ屋根の下で暮らしていれば風邪がうつってしまうことは止むを得ないことと、次女も鼻風邪をひき始めてしまいました。元気で食欲もあるのですが、寝ているときに息苦しそうにしている姿を見ると本当にかわいそうになってしまいます。

ある日、便が少し柔らかくなってきたので村の祈祷師のおばあさんの家をたずねました。そこでお祈りをしてもらい、教えてもらったのが「ユーカリの乾燥葉から作ったお茶を入れたお風呂」でした。これがすごい。お風呂に入っている間に鼻水がきれいにでていき、三日もすると寝ているときの呼吸が楽になってきました。そして、一週間経つころにはすっかり良くなっていったのです。

乳幼児にはあまり薬を使いたくないものです。風邪をひいたり、熱が出る度に薬を処方してもらっては成長途中の体から免疫を奪ってしまいかねません。カノアで子育てするようになり、こういった薬草を身近に感じる事ができるようになりました。自然の中で育つ我が子と日々暮らしている中から学ぶことは本当にたくさんあります。これからも子ども達が健康で、幸せに暮らしていける環境を整えてあげたいと思っています。

人と関わること

信弘 翔

僕はエステーヴァン村にある学校で一ヶ月間、学童保育のボランティアをしていました。正直ボランティアとして働くといっても、その仕事の内容は、子どもと遊ぶ、いや、遊ばれるだけでした。自分は何のためにこの仕事をやっているのか、この仕事に意味はあるのか、と最初から悩んでおり、その答えを見つけないまま、自分から何かしよう、このままではダメだ...と思っていたにも関わらず、答えは見つからないまま、何もできないまま時間は過ぎていくばかりでした。

そして、ついにそこで働く最後の日がきました。複雑な思いと共に学校に行くと、いつもと変わらない教室に、いつもと変わらない子どもたちがいて、いつもと変わらない授業がありました。自分がいなくなっても、この先何も変わることなく子どもたちは生活していくんだろうな...そんな思いを抱きながら、ついに別れのあいさつの時間がやってきました。円になって座り、自分が一生懸命考えてきたポルトガル語であいさつをし、その後子どもたちが一人ずつ僕に対し言葉をかけてくれました。照れながら、恥ずかしそうに、あなたがいてくれてよかった、また帰ってきてね、など、言葉自体はほとんど理解できなくても、気持ちは伝わってきました。何もできなかった自分に対し、優しい言葉をかけてくれる子どもたちを前に、涙が止まりませんでした。自分はここにいてよかったんだ...

なぜ自分はその時泣いたのかよく考えます。大好きな子どもたちと別れるのがさみしくて泣いたのか、こんなにも思ってくれていた子どもたちに対し何もできなかった自分が悔しくて泣いたのか、自分が働いてきた意味があったのかずっと不安だったけど、子どもたちにとって意味があったんだと自分が思えたから安心して泣いたのか...答えはわかりません。そんな思いが混ざっていたのだと思います。

よく、本当に好きなことを仕事にできる人はほとんどいないと聞きます。しかし、働くことの意味、

働くことでの喜びは、自分自身から見つけるものだと思うようになりました。例えこれからどんな仕事をするにしても、どんなに嫌な仕事でも、きつと自分なりに意味が見つけられる、喜びを見つけられるのではないかと思うのです。

そして、それを見つけないために、人がいます。人がいて初めて、自分の働く意味、喜びが生まれると思います。さらには、人がいるからこそ生きる意味、生きる喜びが生まれるのではないのでしょうか。一人で仕事をしていても、一人で生きていても、それは一生見つからないのかと思います。人との関わりから、自分の働くこと、生きるこの意味、喜びを探し続けることが大切なのではないでしょうか。

エステーヴァン村で学童保育の手伝いをし、ここにおいて働いて意味があるのか悩んだからこそ、こうやって色んなことを感じる事ができました。これからは、何をするにも人との関わりを大切にしていきたいと思えます。

時間は限られています。大学生活であれ、働く社会人であれ、人生であれ。限られた時間がなくなつた時、何が残るのか。それをより価値あるものにするのは、ほくにとつて人と関わることです。大事な友達をつくることであつたり、家族であつたり、恋人であつたり。こんな自分にとつて大事なことを気づかせてくれて本当にありがとうございます。

目には見えないエネルギー

下向井稔史

私は、エステーヴァン村で約四十日間お世話になりました。海、砂丘、森、月、夕日...この村では、息を飲むような自然の風景が一日中見ることが出来ます。

ある日、村の子ども達と、普段は行かない遠くの、高さのある砂丘まで遊びに行ったことです。子ども達に遅れながらも、その丘の頂上にたどり着いたとき、私は言葉を失いました。そこからは三六〇度、地平線と水平線しか見えないのです。どこまでも広がる海や森。そしてあたり一面をその地平線に沈んでい

く夕日。今でも、そこで見た景色が頭に焼きついていきます。そこから見える景色がカノアで見た景色の中で一番素晴らしいです。しかし、皮肉にもその場所は風力発電の風車が建設中の場所でもありました。

一見すると大自然が残っているように思えるこの村も、風車ができたり、観光地街が隣接したりと、開発がすぐそこまで迫ってきています。そんなことを考えていると、ふと悲しい気持ちになるのですが、子ども達や若者の笑顔を見たり、一緒に遊んだりしていると、元気が出ます。四十日近く彼らと過ごしましたが、みんな優しいし、遊び心を忘れない。そしてとにかくよく笑う。私は、どこか目に見えないエネルギーを毎日もらっていた気がします。

開発と隣り合わせにあるこの村も、そんな若者たちのパワーが上手く働けば、いい方向に進むのではと思います。この村の将来はこの村の若者にかかっています。この素敵なエステーヴァン村が将来も素敵なエステーヴァン村であるように。



ボランティアの皆さん、どうもありがとうございました！ (以下2008年4月より現在まで)

2008/1/28 - 現在：福田太志さん

2008/8/1 - 現在：Harm Timme

2008/8/4 - 2008/9/10：信弘翔くん

2008/8/6 - 2008/9/10：下向井稔史くん

2008/8/14 - 2008/8/31：藤沢智佳子さん

農業への取り組み、コミュニティーセンター管理及び補修

ドイツ人、小学校分校の助手、英会話教室の開講、青少年グループに参加、協力(※)

学生、学童教室のお手伝い、サッカー教室のコーチ補佐

学生、コミュニティーセンターの管理、補修補助

学生、1年生(前プレ・エスコラ)のお手伝い

※今年度より、ドイツの団体『Freunde der Erziehungskunst Rudolf Steiners e.V./』と協力し、ボランティア(1年滞在予定)の受け入れを開始。今後、毎年ボランティアを1人派遣してもらう予定。



平成 19 年 3 月 21 日 - 平成 20 年 10 月 3 日現在までに会費及び寄付を頂きました皆さま及び物資支援を頂きました皆さまのお名前を下記に記載いたしました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。
これからも 1 人でも多くの方に会員になって頂き、カノアの活動を共に支えていただけると嬉しいです。
目標会員 100 名!!!

会費及び寄付を頂きました皆様

(以下順不同)

市川由美子さま
 稲谷千妃呂さま
 Sr. Henrique、Sr. Diego
 OSC の皆さま
 大塚崇志・晶さま
 大庭富美香さま
 金本りせ子さま
 (株)カメイ・プロアクト
 川原翼さま
 神戸保・めぐみさま
 坂井春菜さま
 佐々木静子さま
 汐見稔幸さま
 汐見和恵さま
 鈴木晴夫さま
 鈴木真由美さま
 中澤敦さま
 平川靖さま
 福井俊紀さま
 堀池眞輔さま
 松丸綾乃さま
 村上誠さま
 横浜南養護学校教職員の皆さま
 吉田可南子さま

有り難うございます!!

物資支援を頂きました皆様

(以下順不同)

Dra. Claudia Altieri
 Sra. Claudia Linhares
 信弘翔くんとその協力者の皆さま
 Maresia
 横浜市立栗田谷中学校
 和井田なみさま

カノアでの活動や生活を通して、皆さんと共に学びあうことができるのではないだろうか?そんな思いから、現在下記の 2 つの雑誌にカノアの活動のこと、日常生活で感じたことなどを連載しています。ご興味のある方はぜひご覧下さい。

■ 婦人通信

〒 151-0051
 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-11-9-303
 婦人通信編集部
 tel:03-3401-6147 fax:03-5474-5585
 e-mail : fujin-tsushin@cotton.ocn.ne.jp
 http://www16.ocn.ne.jp/~fudanren/

■ めたもるふおーぜ

〒 520-2271
 滋賀県大津市稲津 2-15-6 (黒川方)
 tel / fax : 077-546-4147
 e-mail : metamor4se@yahoo.co.jp
 http://www.geocities.jp/metamoru4se/

カノアでの日々
 雑誌にて連載

光の子どもたちの会

「光の子どもたちの会」では、会員、協力会員を募集しています。支える会では「手工芸品の販売」「講演会」などにより多少の収入がありますが、充分な額ではありません。会の運営は全てボランティアにより運営されています。1 人でも多くの方々に会員、協力会員になっていただき、この会を支えていただきたいのです。
 頂きました会員費、協力会員費及び寄附などは、支える会の活動費、運営費となります。会員の方々には年 2 回の会報、講演会や、イベントなどのお知らせを、ブラジル事務局よりお送りいたします。

一般会員：年会費 5000 円
 協力会員：年会費 1 口 36000 円以上任意額
 尚、寄附、カンパは随時受け付けています。

■ 郵便振替

口座番号：00280-1-41787
 加入者名：光の子どもたち-カノアの活動を支える会

■ ブラジル銀行 (Banco do Brasil) 口座

Agencia 0121-x
 Conta Corrente 26357-5
 Associacao Crianças de LUZ

支援者募集!!!

今後も「光の子どもたちの会」として活動を継続していくために、最低でも現在 32 名の会員を 100 名にまで増やすことが必要不可欠であると考えています。現状では現地での活動を支えていくために必要な最低限の費用をまかなっていく事も、難しくなってくるでしょう。1 人でも多くの方に会員になって頂き、また寄付を頂くことができますよう、皆様のご支援・ご協力をお待ちしております。チラシの配布など、個人・団体問わず当団体の啓発に努めて下さる方はぜひ、日本事務局までご連絡いただければと思います。

「光の子どもたちの会」日本事務局 (堀池事務局長)

tel / fax : 045-321-1824
 e-mail : horiike59@msi.biglobe.ne.jp